

## 伊蘇普物語

## 牧羊譯

## 其二十 仔鹿と母親

小さな仔鹿が或時母親に申しますには、「おつ母さん、犬から見ると大きくはあるし、速くはあるし、走ることも甘いし、おまけに二本の角もあれば大丈夫でないか、夫におつ母さん、いつでも臘犬どもを一目見ると、まーあんなに狼狽して逃るのは、どうしたのです」すると母鹿はニッコリ笑ひながら答へました。「全くお前の言ふ通りだよ、夫は私百も承知して居る、けども私はね、一匹でも犬の吠える聲を聞くと、もー弱つて仕舞つて、一生懸命に逃げたくなるのだもの」

口前の議論は臆病者に勇氣を與へることが出来るな。

## 其二十一 驢馬と狐と獅子と

驢馬と狐とが互に自家の利益を保護する目的から攻守同盟を結んで、他獸を狩りに山へと出かけました。所が出かけると間もなく一匹の獅子に出くはしました。狐は危険の迫つたと見て取つて、すぐ獅子の側近く倚つて、若し私を見逃がして呉れるといふことなら、あの馬鹿な驢馬を生擒にして進ませせうと申し出した。獅子は夫を聞いて、然らば其方丈は許し遣はさうといふ事になつたので狐は驢馬を連れて行つて、とうとう計略で以て深い／＼陥穽の中へつき入れて仕舞ひました。夫まで獅子は黙つて狐のする事を見て居つたが、もー驢馬は逃げつこなしと決つたので、すぐ狐に跳りかゝつて、たゞ一口に食つて仕舞つて、其後でゆる／＼と又驢馬の御馳走に預りましたと云ふ。

其二十二 蠅と蜜壺

臺所の隅に蜜壺が、ひつくり返つて居た所へ、澤山の蠅がいー香を嗅ぎつけてやつて来て、蜜の上に留つて腹一胚食つて居ました。さて歸らうとした所が、皆脚が蜜にクツついて仕舞つて飛ぶことも出来なければ身動きも出来ない、もー皆な死なうとする際になつて一度に叫び出しました。「まー何んと我々は馬鹿な動物だつたじやないか、少し許の快樂の爲に今に死なねばならなくなつたとは』

其二十三 牝獅子

或時野の獸どもが倚つてたかつて議論をしまして一体一度に一番數多く子を産むことの出来る獸は誰だらうといふ議論だか中々決らないので、手つ取り早く牝獅子の所に行つて裁判して貰うのが第一だといふので皆で揃つて牝獅子の前に出かけた

した。だん／＼話して居る中に、「夫はさて置き、あなたは一度に何匹か生みになりますか」と聞くと、牝獅子はニッコリ笑つて「何だつて！分らないじやないか、妾はたつた一人さ、けども其一人といふのはね、まつたく立派な獅子の子だよ」物の貴さは、數にわらずして其物の價值にある

●簡易英語

Book. \* Pen. \* \* Fable. 寓言  
Bring me that book and pen.

わの本とペンを持つておいで  
What book is that ?

それは何の本ですか  
It is Aesop's fable.

伊蘇普物語の本です